

「こういうもの」の枠を外して 職業を捉え直す

知らず知らずのうちに、私たちは凝り固まった認識の枠組みの中で、職業を捉えているのかもしれませんが。その「こういうもの」の枠を外してみたら、よく知ったはずの職業でも、また違った“顔”が見えてくるのでは？編集工学研究所の安藤昭子さんと先生方4人が、ワークを交えながら意見交換した様子をレポートします。

取材・文／塚田智恵美 撮影／平山 諭

宝仙学園高校
理数インター
(東京・私立)
生徒支援部長
馳川祐子先生
※現在のご所属:
大阪偕星学園高校 教頭

浜松商業高校
(静岡・県立)
教務主任
高林直人先生
※現在のご所属:
常葉大学経営学部准教授

ファシリテーター
編集工学研究所
安藤昭子さん

神奈川工業高校
(神奈川・県立)
工業科・進路ガイダンスグループ
教諭・サプリーダー
栗山博樹先生

小瀬高校
(茨城・県立)
特別活動部長
金子容子先生



編集工学研究所・代表取締役社長。2010年に編集工学研究所に入社。企業の人材開発や理念・ヴィジョン設計、教育プログラム開発や大学図書館改編など、多領域にわたる課題解決や価値創造の方法を「編集工学」を用いて開発・支援している。



ワークショップの参考図書

問の編集力
(ディスカヴァー・トゥエンティワン)

なぜ「問う」ことは難しいのか？ 大人になって問えなくなるとしたら、何が邪魔をしているのか？ 「問い」はどこからどうやって生まれてくるのか？ これらの問いの発生に関するメカニズムについて、編集工学の視点で探究する一冊です。

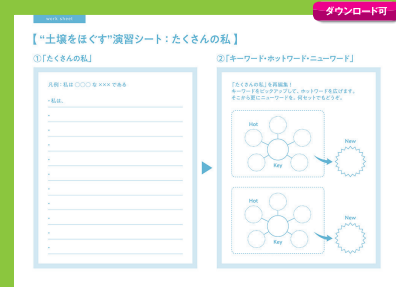
何より見方が固まりがちなのは自分像。多面的な「私」を知る

次のルールで「たくさんの私」を書き出しましょう

「私は○○○な×××である」という構文を、最低20個、できれば30個。「×××」は名詞、「○○○」はそれを修飾する言葉。いずれも、同じものを2回使ってはいけない。



高校生でも、「私はこういう人間だから」「どうせ私はこの程度だから」と口にする生徒さんがいるかもしれません。無意識のうちに、自分というものへの認識が狭まり固まってしまうのです。まずはそこからほぐしてみましょう。



ワークシートはダウンロードしてご使用いただけます。

「たった一つの名前に縛られているところから脱する」

授業内容や進路指導などそれぞれに異なる特色をもつ高校からお集まりいただいた、4名の先生方を前に、ファシリテーターの安藤さんから「職業について考える前に、私たちのものの見方を、柔らかくほぐすところから始めたい」と話があった。そこで冒頭では、多面的な自分を知るためのワークをやってみることに。「私は○○○な×××である」という構文に当てはめて、さまざまな自分を言葉にしていく。

「自分を説明する名詞を考えてみると、まずは『教員』『親(子)』など、社会的な属性を表す言葉が思い浮かぶかもしれません。でも、そうした表層的な属性情報を出し切ると、自分を何かに見立てざるをえなくなる。そこから、このワークの面白いところです。なんとも言葉にしたい自分らしさが、顔を出し始めます」(安藤さん)

「最低20個書く」というお題に、最初は戸惑いの表情を見せた先生方も、黙々と筆を進めていく。書かれたフレーズを発表してもらうと、後半になるにつれて、自分を表す言葉がどんどんユニークになっていくのがわかる。

「私はにんじんの嫌いなうさぎである」(見た目で決めつけられがちな性格と

実際の自分が違うように感じるから)、「手先の不器用な大工である」(ものごとの構造が好きだが、自分で組み立てることは苦手だから)と、矛盾する自分を発見し、表現した先生もいた。

こうして出てきた「たくさんの私」を再び編集し、新しい自分を表現するキャッチフレーズを考えることに。ポイントはその言葉を考えるとワクワクする、きもちいい、といった感覚を大切に、自由に言葉を連想していくことだと安藤さんは語る。先生方からは「知識の酒」「つなぐ・つながる田舎暮らし」など、その方の素顔がうかがえるような、ユニークなキャッチフレーズがたくさん飛び出した。

安藤さんは、現在放送中の大河ドラマの主人公・蔦屋重三郎が、狂歌師としては別の名を名乗っていたことを例に出しながら、「現代を生きる私たち、自分自身の本当の名前というものに少し縛られすぎているところもあるのではないだろうか。それが自分のものの見方や、想像力を狭めることにもつながっているかもしれない」と語る。高校生でも「私はこういう人

思いもよらない自分の「らしさ」が連想した言葉の中に見つかる



間」と無意識に決めつけ、進路の選択肢を狭めている生徒がいるかもしれない。「私たちには本来、たくさんの顔があります。整合性のとれた一種類の私という幻想から脱して、もっと自由にあそびをもたせてみる。すると、それまで気づかなかった、新しい自分が表に出てくるかもしれませんね」(安藤さん)

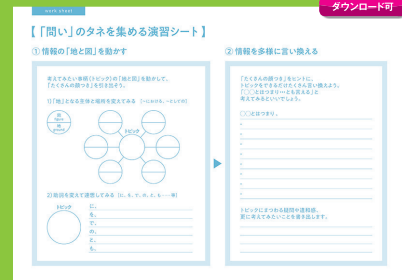
よく知っているはずの“教員”を改めて説明するなら？ 多面的に職業を捉える

「地」と「図」を動かして“教員”を言い換えましょう

～にとって、～におけるの「～」にあたる主体や場所（地）を動かして、その文脈で教員がもつ意味（図）を、多様に表現してみる。



マグカップはお店（地）にあれば商品（図）ですが、ゴミ捨て場（地）にあれば燃えないゴミ（図）です。あらゆる情報には、常にたくさんの顔つきがあります。誰が、どこから、どのように見るか。視点を動かして“教員”を見てみましょう。



ワークシートはダウンロードしてご使用いただけます。

向き合う生徒によって変わる
教員のもつ意味や役割

情報の多面性とは、さまざまな文脈（地）の上に展開される、たくさんの意味（図）のバリエーションのことだと安藤さんは語る。「教員に関わる主体（生徒や保護者など）や、場所（学校や社会など）を意識的に切り替えることで、それまで見えていなかった教員というものの側面が見えてくるのでは？」（安藤さん）

そこで「地」を自由に変えながら、その「地」において教員というものがどのような意味をもつかを書き出してみること。

生徒にとって、保護者にとって、学校において、地域において、社会において…と、「地」を変えることに、見えてくる教員の顔つきが変わる。例えば、自由にやりたい生徒にとって、教員は「看守」のような存在にもなりかねないが、みずから考えを深めたい生徒にとって、教員は「コーチ」である、というような回答も挙がった。向き合う生徒によって、教員の役割やもつ意

味も変わる、ということだろうか。

ある先生は、社会という「地」において、教員とは「一定の装置」である、と書いた。どういうことかと詳しく聞いてみると、日本の公立小学校を取り上げて話題をよんだドキュメンタリー映画（『小学校』それは小さな社会）の話や、過去に遭遇した生活指導の例を出しながら、「日本社会において公教育には、集団の中での協調性を育む側面がある。もちろんそのことの良い面もわかっているが、別の面から見ると、教員が『日本社会にうまく適応する人物をつくる、装置のようなもの』だと思えることもある」と語った。

一方、同じく社会という「地」を設定して、教員とは「持続可能な社会の形成者」だと捉えた先生もいる。どちらの回答も、現場で日々働かれている先生の、これまでの経験による実感がこもったものだった。

（先生方から挙がった回答の一部を、次ページの図に抜粋しています）

ここまで、意識的に文脈を変えながら教員のもつ意味を考えてきた。さまざまな側面で教員がどのような

「教員という職業」に

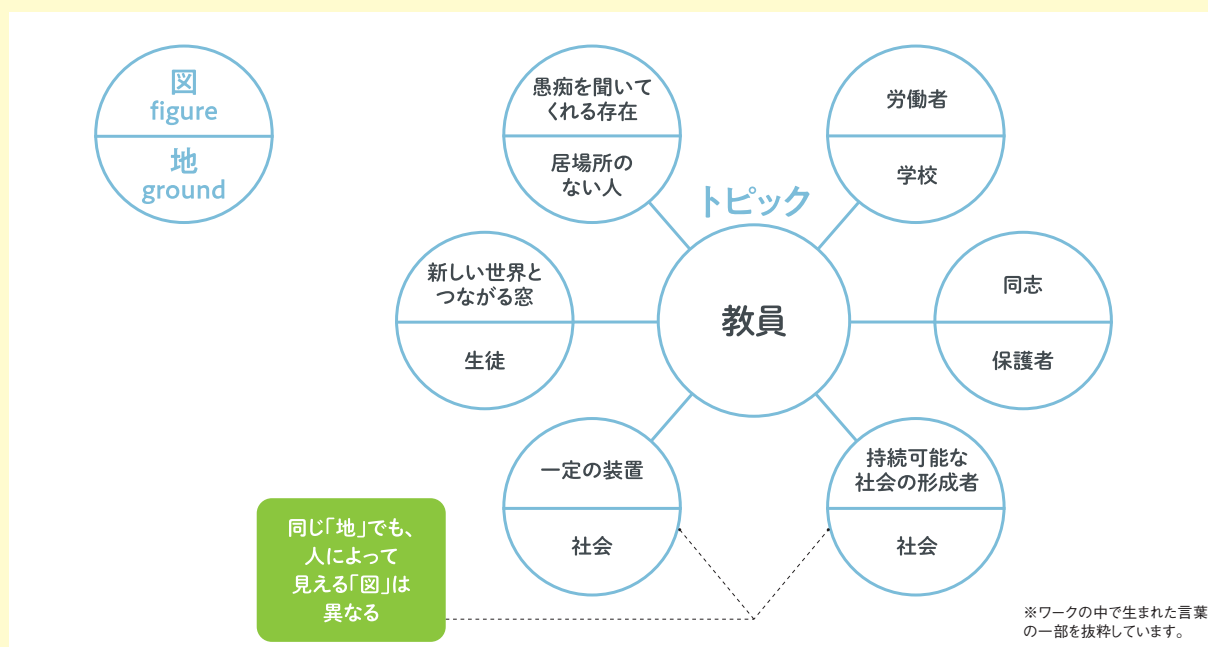
これだけ異なる顔つきがあること



役割を果たしているか、言語化してきたところで、改めて「教員とは、つまり～とも言える」と、教員という職業を言い換えてみることに。

先生方からは「教員とは、生徒が新しい世界につながる窓とも言える」「教員とは、まだ知らない自分らしさを引き出すファシリテーターとも言える」などと、さまざまな視点を取り入れた回答が挙がった。ほかの先生の発言を聞いて「教員という仕事に、これほどまでにさまざまな意味や役割があると思わなかった。もはや教員とは日本のことであり、未来そのものである

“教員”とはつまり、何か？ 意図的に見方を変えて捉えてみる



“教員”とはつまり…？

- 生徒が新しい世界につながる窓
- まだ知らない自分らしさを引き出すファシリテーター
- 教材開発者と阿吽の呼吸で授業を創り出す者
- 社会が求める人材をつくりあげて世に出す装置
- 日本であり未来



ワークを通じてうかがえた 人柄や仕事観

ここまでの2つのワークを終えて、先生方からは「教員歴はそこそこあると思っていたが、自分が想像もしなかった教員像が皆さんから出てくること」と語った。

「先生方の回答を聞いて、安藤さんは「私が一人の生徒だったときには見えなかった、教員の別の顔」がたくさん見えました。生徒たちにとって、地域にとって、社会にとって、教員が果たしている役割はそれぞれ異なり、これだけ幅があるんですね。いち市民としては、希望を感じる時間でした」と語った。

驚いた」「個人の経験や個性によって、職業をどう捉えているかが違う」といった声が挙がる。参加された先生方は、この日が初対面だったが「皆さんが普段、教員として、どのように働かれているかが、ありありと想像できるようだ」「ほかの先生方の回答を聞いているだけで、胸が熱くなる」という声もあった。それぞれに抱く教員という職業への思い、人柄、仕事観…。普段同じ職場で働いていてもなかなか見えない顔が、ワークを通じて透けて見えてくるようだった。

「学校の教員というと、世間では教科指導や生活指導のイメージが強いと思う。生徒たちからも「指導する者」としての顔しか、なかなか見えないかもしれない。しかし、ここに集まった4名だけでも、これほどまでに教員というものをどう捉えるかに幅がある。生徒たちには自分だけでなく、さまざまな教員に触れて育ってほしいと改めて感じた」と語った先生もいた。

自分にたくさん顔があるように、教員という職業にもたくさん顔つきがある。ある面ではジレンマも抱えながら、同時に、誰かにとって欠かせない役割を担っている。それはきっと教員だけではないだろう。ほかのあらゆる職業にも、表からはなかなか見えない顔つきがある。

職業がもつ多面性、働くことの多様さと、高校現場

職業観育成の授業や職業体験での悩みはありますか？ これから生徒に伝えていきたいことは？



ここまでのワークでは「私」と「教員」を題材に、見方や捉え方を柔軟かく広げてきました。
このディスカッションでは、高校現場における職業観育成の授業について、さまざまな視点からお話できればと思います。



自分は何に心を動かされるのか、
何を大切に生きるのか。
外側の見えやすい部分に
振り回されないで、
職業を選んで
ほしいですが…。

金子容子先生



数字で測れる基準だけではない

「自分」にも「職業」にも、さまざまな顔があり、一つの視点からは捉えきれないような多様な側面をもっている。社会に出たことのない生徒たちが、その多様さや豊かさを、どれだけ想像できるだろうか。ここからは安藤さんから問いを投げかけてもらいながら、先生方が日頃から職業観育成の授業や職業体験で課題に感じていること、率直な悩みなどを、自由に話し合っていた。

特別活動部長として探究の授業も担当する金子先生は、生徒たちが給与や待遇などの見えやすい部分に振り

り回されがちに課題を感じているという。

「探究活動を通じて、自分の興味や関心と、進学先で学びたいテーマが重なっていく生徒もいます。ただ、卒業後就職を希望する生徒は、求人票を見て数字で測れる部分を比較して選びがち。長い人生の中で『働く』ということを考えるとき、わかりやすい数字や職名だけでなく、『どう生きたいか』という自分なりの視点をもって考えてほしいです」(金子先生)

商業高校に勤務し、生徒の半分が高校卒業後に就職するという高林先生も「休暇日数などの待遇、人間関係をうまくやれるかといった環境面に目が行きがちです」と頷く。

馳川先生は、進学指導をした生徒から「大学に入学するための話ではなく、人生において大学はどんな場所なのか、という話を先生から聞いたかった」と言われた経験を紹介しながら、進学や就職をゴールにした指導で良いのかと問いかける。さまざまな制約があるなかで、進学という指標における効率性や、体験授業を安全に成立させることが優先されてしまうときもある。「職業体験で行く先が、世の仕事のすべてではない。大人たちが必死で探してきた受け入れ先を生徒に割り振るだけでは、生徒たちの心が

同じ職業でも「やりがい」は
人それぞれです。

働いたことのない生徒たちが
「何のために働くか」を
想像するのは、
なかなか難しい…。

栗山博樹先生



震えるような体験につながらないので
はと、自問自答することもあります」

(馳川先生)

一方、工業高校に勤務し、就職する生徒への指導をすることが多い栗山先生からは「働くうえでやりがいは大切だが、まだ働いたことのない生徒たちに『やりがい』を考えて職業選択をして』と言うのは、なかなか難しいもの。就職活動時点では、比較できる数字や情報をしっかり見ていくことも大切では」という意見も挙がる。

職業を選んだ、その「先」で
みずから動き出せる力を

職業を取り巻く社会の変化も激し

職業をみずから創り出す時代に
「雇われて働く」ための力だけを
教えていて良いのでしょうか。
私はもっと
「働くことの楽しさ」を
伝えたいです。

高林直人先生



い。昨今。高林先生は、「商業高校の授業で扱う接客や簿記といった内容は、以前なら職業選択に直結するものでした。しかしAIの出現によって、どんな仕事内容が変わるのが当たり前になっていく。だからこそ、高校時点でどの職業を選ぶか以上に、選んだ先でキャリアチェンジをしたいと思ったら、自分で動き出せる力をもっていることが大切になるのでは」と語る。金子先生も「動き出そうというとき、外側の価値に惑わされない選択の軸を、自分の中で育てていくこと」の大切さを指摘。「探究の授業の最初のステップとして『自分を知る』ことを掲げています。自分を肯定的に捉えて、自分

にとつての幸せを理解するところから、探究が始まると考えている。職業選択も同じで、『何をしているときに幸せを感じるか』『社会にどう貢献したか』というような自分の軸が見えてくると、職業への見方も一段階深まり、自分の人生を主体的に生きられるようになるのでは（金子先生）
ここで安藤さんが「わかりやすい外側の価値に惑わされずに、世にある職業を見るところは、大人にとっても大切なこと」と話し、「そのみずから立ち止まり考える力を育てるためには、どんなことが大切なのか」と問いを投げかける。
馳川先生は「授業に、あらかじめ余白を織り込んでおくことではないでしょうか」と回答。「例えば一見、暇そうでゲームばかりしている生徒がいても、それは『自分の心が動くこと、やりたいことが見つからない』という状態かもしれない。それなのに『暇そうだから』とやるべきことを課してばかりいては、自分自身についてじっくり振り返る機会がなかなかもてません。生徒が自由に感じ、気づき、自分について考えることができるような余白を、授業のあらゆる場面でデザインしておくことが、結果として、生徒たちのみずから立ち止まり考える力を育んでいくのでは」（馳川先生）

職業選択は「働き方」ひいては
「生き方」選択でもあります。
だからこそ急かさず、
効率を求めず、
授業に意図的に余白を
取り入れたいです。

馳川祐子先生



職業の変化する時代に 一生考え続ける「働く意味」

高林先生からは、技術革新が起こり、新しい職業がどんどん生まれていく時代に「どこかの企業に雇われて働く」ための力だけを教えていて良いのか、という問題提起がされる。「職業観育成の授業は、ともすれば、職業を社会の中の『枠』のように捉え、どうすればその枠に生徒を当てはめられるかという指導になりかねない。すでにある職業名のリストから『どれにしようかな』と選ぶことだけが『職業選択』ではないと知ってほしい。そのためには、人それぞれに異なる、働くこと

の楽しさを、もつと伝えていきたいです」（高林先生）

職業は、決まった『枠』ではない。先生方が多様に教員像を言い換えたように、人それぞれにその職業に抱く意味や役割は違う。教員は、生徒にとつて最も身近な職業の一つだが、ワークで出てきたようなそれぞれの思いに生徒が触れる機会はなかなかないと、先生方は言う。

またワーク中には、教員という職業が「装置」に思えてジレンマを感じることもある、という発言もあった。職業に対するこうした自己批判的な意見を、生徒が聞く機会はどれだけあるだろうか。やりがいや意義など仕事の良い面ばかりが取り上げられがちだが「ジレンマを抱えながらも、どのようにその職業に就いているか」という姿勢からも、生徒たちは何かのヒントを見出すかもしれない。

栗山先生は「そもそも今日のように、さまざまな側面から職業を捉える場が、学校にあつてもいい」と話す。「時間の制約があるなかでどのようにその機会をつくるかは難しいところですが、職業とは何か、仕事とは何かということとは、私たちも一生考え続けるようなテーマ。なかなか答えが出ないものだが、これは大前提として、生徒たちにも問いかけてみたい」と語った。



職業名ではなく働く喜びを

今日参加して、仕事とは単にお金を稼ぐ手段ではなく、遊びであり、自己成長であり、社会貢献であると感じました。職業観育成というと、とかく今ある職業名や企業名を伝えることに結びついてしまいがちです。でももっと根源的なこと、例えば「自分が得意なことで、誰かから求められる」場面や「誰かの役に立てると嬉しい」という喜びをつくるのが、生徒たちの職業観育成の第一歩になるのではないのでしょうか。(高林先生)



「生きざま」としての職業

いい大学へ進学し、いい会社に入れば幸せになれるという神話が崩れ、生徒たちも探究の授業を通じて「勉強ができるだけでは幸せにならない」と感じ取っているように思います。探究とはまさに、その人の「生きざま」を表している。あなたはこれまで何に関心をもってきたのか、これからどんなことに心を寄せて生きていくのか。その視点は、世の職業を見つめるうえでも大切にしていきたいと、今日改めて感じました。(馳川先生)



「自分で感じ、考える」こと

一つの言葉で括るのではなく、あえて別の言葉で表現することで、違う方向から職業を見ることができたのが面白かったです。高校に限ったことではないですが、学校の中では、時間的制約のなかで先回りして教員が誘導してしまい、それが生徒たちの自分で決める機会を奪っているのではと葛藤することもあります。多様な生き方を知り、さまざまな職業観に触れる機会と、生徒たちが自分で感じ、自分で考える時間を大切にしたいと感じました。(金子先生)



教員という職業の楽しさを再確認

普段、自分の職業についてさまざまな側面から考えてみる機会はなく、皆さんの言葉を聞きながら、教員とは楽しい職業なのだと改めて感じました。多様な視点から職業を捉えることで、仕事の本質がわかる。しかし現実には、就職活動のスケジュールが決まっており、それに間に合うように職業選択を促さざるをえない面もあります。そのなかでも、生徒たちが職業について知る視点を広げていけるよう、考え続けたいです。(栗山先生)



一人の人間としての
言葉を交わしあう場を

教員という職業一つとっても、先生方の個人的な経験をふまえると、多様な表現で言い換えることができる。「教員」としてではなく、一人の「人間」としての実感を言葉にしてくださいと感じます。一つの職業名だけでは簡単に括れない、人間としてのリアルな働く像を、どのようにして生徒たちに伝えていくか。現実的には、時間の制約もあり、学校でこのような場を設けるのはなかなか難しいかもしれません。ただし今日、先生方がお話しくださったような、働く一人の人間としての痛みや葛藤、やりがい、喜びに触れることは、まだ社会に出たことのない生徒たちにとって、むしろ「希望」になるのではないのでしょうか。給与や待遇といった外側の物差しでは測れない、働く人間の生身の言葉が、教室で、職員室で、交わされていること。大人たちが「ある職業像」に当てはまらない感情を持ち、それぞれ異なる意味を見出し、それを言葉で交わし合っているということ。それこそが、社会に出ることに漠然と不安を抱く生徒さんたちへの、何よりのエールになるのではないかと感じました。